

オランダ便り

子育て事情 in アムステルダム



向山 陽子

一九八九年から一九九三年にかけての四年四か月、夫のオランダ赴任に伴い、娘（渡蘭当時六歳）との家族三人で、アムステルダムに南接するアムステルフェーン市に在住。昨夏帰国しました。

日本人駐在員が急増し、それも学齢に達しない子どもを持つ若い世代の派遣が増える傾向の中でアムステルダム周辺の幼児達、母親達の健気な姿に、多くを感じてきました。

このレポートでは、日本人の多く住む地域に開いた日本語の絵本文庫“ぐりんぐ”の活動が、乳幼児の子育て真最中の母親達の要望で、プレイグループ、医療相談、子育て相談、妊産婦の会へと広がっていった様を報告し、オランダ在住の日本人乳幼児、子育て期の女性達の現状を伝えると共に、海外での子育てを、又、海外での日本人乳幼児の健全な育ちを保障するための援助の必要を訴えたいと思います。

○オランダの五月五日

私共がホテル住まいから、アムステルフェーン市の家に移ったのは四月半ば。引っ越し荷物の片づけ、娘のインターナショナルスクールへの転入と慌ただしい毎日が過ぎた四月末のある日、親切なお隣りの老夫婦と、庭の垣根越しに必死で会話（？）をしました。御主人は、オランダ語とオランダ語訛りの片言英語、御婦人はフリースランド語（オランダ北部の言語）とオランダ語。私は片言英語。

身ぶり手ぶりを混じえて、三割程度の理解度でしょうか。

ブランドズマ夫妻が私達に伝えたいのは、「四月三十日は女王の日で、国中でお祝いをするよ。街では子ども達も店を出してよい日で、オープンマーケットがあちこちで開かれ、楽しいからは非行行ってらっしゃい。」

私は友好の気持ちをこめて、「ありがとう。楽しみです。オランダの女王誕生日が四月三十日？ 日本の、一

月に亡くなった昭和天皇の誕生日は二十九日です。一日しか違いませんね。」これだけを伝えるのがどれだけ大変だったか……。ところが、やっと通じたと思った途端、ブランドズマさんは険しい顔になり、奥さんにフリースランド語で伝えると、奥さんも、表情を変えて家の中へ入ってしまいました。私は、何か間違っただけなのではないかと心配になりました。ブランドズマさんは険しい顔で「ヒロヒトか？ 私はヒロヒトは大嫌いだ」と言うではありませんか。知り合って間もない人の口から「大嫌い」という強い言葉を聞いただけでも動揺している私を察して、彼は「今度の天皇、アキヒトはどんな人間だ？」と、笑顔を作って尋ねました。

渡蘭当時の私は「エンペラー・ヒロヒト」の意味する所など、まったく無知だったのです。

そして……五月五日が近づきました。

「鯉のぼりを立てないように」五月四日（終戦記念日）五月五日（解放記念日）は、アムステルダム中心街へは、日本人は近づかないように」と、夫が情報を持ち

帰りました。

オランダでは、オランダ国旗以外の旗の掲揚は禁じられており、ヒットラー率いるドイツ軍との終戦、ドイツ軍がオランダ国外へ撤退した記念日に、日本人が、国旗でなくとも、又、真意は子供の成長を願うものであつても「のぼり」（幟・戦意高揚を目的とする旗でもあつた）を掲げる事が誤解を生む事は必至でしょう。

そして、五月四日、五日の記念日は、オランダ国民にとっては、国が自分達の国になった祝日。中心街ではお祭り騒ぎになるだろう。そんな高揚した気分の中に日本人を見たら、何が起こるか保障できない、と警察から、親切に注意報が入ったそうです。

事実、友人の家の庭の大本二本が、五月四日の夜、切り倒され、二歳の女兒を持つ若夫婦は恐ろしい夜を過ごしたと話してくれました。

又、オルガンの勉強に來ている女子留学生は、アムステルダムの下町に住んでおり、中心街を通って学校へ行く途中、ダム広場で、日本に対する、オランダ人捕虜、

慰安婦の補償請求のデモ隊に会い、口汚なくののしられ、唾をかけられたが、下を向いて立ち去るしかなかったと話してくれました。

家で静かに過ごした私達も、日本での子どもの日とは、似ても似つかない緊張の両日でした。というのは、テレビをつけると、朝から晩まで、ずっと、第二次世界大戦中のフィルムが流れているのです。日本では見たことのない映像ばかりです。ドイツ軍の行為は勿論の事、インドネシアでの日本軍の行為を収めた映像も流れます。正直、私にとって、あんなに汚れた日の丸を見たのは、初めてでした。

以上が、オランダで迎えた、初めての「子どもの日、五月五日」でした。

オランダでも雛まつりにはお雛様を飾ろう、子どもの日には、七夕には、お月見には、七五三には……と、日本にいれば味わる子どもの行事を、できるだけ体験さ

せてやろうと、張り切っていた私には、この初めてのオランダでの子どもの日は強烈な記憶となりました。

この「子どもの日、五月五日」という事実は、以後、東ヨーロッパの激変、湾岸戦争等の世界の動きの中で、それぞれの国の、民族の文化重視へと世相が変化し、又、経済力、教育力のある日本コミュニティが注目され、日本文化紹介があちらこちらの学校で紹介される時も、日本人の頭痛の種となりました。

子どもの育ちを大切にしてきた日本文化を紹介するのは「五月五日・子どもの日」が最適なのですが……三月三日・雛祭り、十一月十五日・七五三を先に紹介したものです。

オランダは、外国人に対して寛容で、家族を大切にするし、食物も日本人にはなじみ易く、駐在するには良い国といわれます。

又、事実、のんびりと子育てをするには良い国のよう

に思われます。

日本にいる時よりも、夫婦で子育てをしている実感がある、夫婦で教育問題についてよく話し合ったと、家族の絆を深め、家族一人ひとりの心の歴史を刻み込む場として良しとされる外地の中でも、恵まれた国のようです。

そのオランダで、幼児期の子どもの育児を体験したAさんとBさんの例から、海外での育児に対して、何を援助していくべきかを、考えていきたいと思っています。

経済活動の国際化を背景にして、好むと好まざるとに関わらず、異国での子育てに挑む日本人家庭、とりわけ主たる担い手である、女性達は増え続けているのですから。

○アムステルダムでの子育て

Aさんは一歳六か月の女兒（Mちゃん）と共に、夫の赴任に伴って、渡蘭しました。活動的なAさんは、当



くりんぐ文庫 子どもの日のつどい

時、手持ちの本を持ち寄り、居間を解放して行っていた「くりんぐ文庫（※1）」に参加。午前中の「ちびくりんぐ（※2）」のメンバーになりました。又、近くの子

育て仲間とも、週一回、自宅を順番に解放して遊ぶ会を作り、「オランダ時代は私の子育て期」とわり切って、Mちゃんと楽しく過ごそうと思うと生き生きと話してくれたのを思い出します。

そのAさんも、Mちゃんの育ちに関していろいろと悩むことになります。

④ オランダの医療に関して

(1) 予防接種制度の違いから来る不安

(2) 医療制度（ホームドクター制）の違いから来る不安

(3) ドクターの処置への不安、疑問等々……

⑤ 気候・風土・習慣の違いに関して

(1) 一年の半分以上が曇り、冬の長いオランダでの日光

浴不足、ビタミン不足等の心配

(2) 太陽が出ると外で遊ばせたいが、砂場、池などの衛

生上の心配。（なにしろ、道、芝生、公園などに

は、犬の糞だらけ。子どもより犬の方が優遇されて

いるのでは？ と思ってしまう光景多々あり。）

(3) オランダは野菜の種類が多く、魚も手に入れ易くて助かるが、馴染みのある材料に片寄り易い。少しアレルギーのあるMちゃんのために、オランダでのアレルギー対策として、又、鶏卵、牛肉、魚等の検査基準等、食物に関する知識を得たい。

(4) 夫婦単位の生活は良い面も多いが、夜の会に、夫婦で招待される事が多く困る。日本人は心情として簡単にベビシッターに頼めない。等々。

© Mちゃんの育ちに関して

(1) 言葉の発達が遅いのでは？

日本語のビデオを流し、夫婦とも意識してMちゃんと話すように心がけているが、活動的なMちゃんは、絵本などにも余り興味を示さず、なかなか日本語が出てこない。家の外では、オランダ語ばかりが耳から入るので不安がある。

(2) 日本語で遊ぶ場がもっと欲しいと、近所の遊ぶ会の回数を増やしたいが、活発なMちゃんの行動は、他のお宅では、母親が疲れてしまう。つくづく日本で

の児童館のような場が欲しいと思う。

(3) Mちゃんが三歳になって、もう、自宅だけでは、活発なMちゃんは満足できないので、オランダのナースリーに入った。楽しく、広い場所で遊んでいるが、先生とコミュニケーションがとれずに一日が終わる。日本人幼児二人だけが好き勝手に遊び、先生もいろいろと試みるが、あきらめている面もあるようだ。

(4) 三歳を過ぎたMちゃんと言葉の心配

言葉が遅いと気になりながらも少しずつ発語するようになったMちゃんだが、発音が不明瞭、語いがかかなか増えないと、言葉に関する心配はつきない。三週間の日本への一時帰国の際、びっくりする程、語いが増えたにもかかわらず、オランダに戻ってからは、又元に戻ってしまった。

Bさんは、四歳二か月の男児Y君と、二歳半の女兒Sちゃんと渡蘭。Bさん母子は、午前の「ちびくりんぐ」

にはSちゃんのために、午後の“ぐりんぐ文庫”は、Y君のためにと、顔を出してくれました。Bさんの悩みは主として、Y君のオランダの幼稚園への適応問題でした。

Y君は日本の幼稚園でもすぐには馴染まなかった様ですが、ごく普通の過程を経て、一学期後半には楽しんで通園していたようです。せっかく慣れた日本の幼稚園を後にしてオランダに着いた当初は、急がずにゆっくりと馴染んでいこうとしていたとおっしゃる通り、母子三人寄りそっていらっしやいました。Y君は、絵本が好きで、語いも豊富。コミュニケーションがとれると、どんな話してくれて、想像力も豊かな、知的な、楽しみな男児です。ところがこのY君が、オランダの幼稚園に馴染まないということです。

考えてみれば当然の事。Y君のように日本語の能力が高く、日本語で友人関係も、自らの知的世界でも存分に遊ぶ事のできる幼児が、急にオランダ語の世界に馴染めと言われるのが無理な話。Y君は登園拒否。Bさんは、“他にも同じ年頃の日本人幼児がいるが、拒否はしないま

でも、日本人だけで勝手に遊んでいる。Yに無理に行けとは言わないが、オランダでは五歳から義務教育なのでどこかに在籍しなくてはならない。日本人学校は、当然の事ながら六歳就学。五歳児の日本人幼児の事を考えてほしい”と訴えておられます。

Aさん、Bさんの悩みは、アムステルダム周辺の幼児を持つ家庭の悩みの典型です。

“ちびぐり”、“ぐりんぐ文庫”の活動の中で、多くのAさん、Bさんの声を聞きました。幼い子を持つ夫婦がまず心配なのは医療の事。次が保健、教育、そして、子育て全般の心理的なサポートがほしいのです。

“ぐりんぐ”では、医療面、カウンセリング面に、有能な協力者を得、日本人小児科医による医療相談、子育てカウンセリングを定期的に開くことができ、子育て期の方々の「心の安全基地」となれたのでは？と自負しています。加えて、オランダでお産をする日本人が集まっています。オランダのお産事情や、経験の情報交換をする会も

でき、その会にも日本人助産婦が話しに来てくれています。

○今後の課題

渡蘭前、海外子女教育に関しては、本も読み、話も聞きました。が、海外での育児に関しては、「家庭がしっかりしていれば、帰国後で十分補える」と耳にするばかり。何を、どのように補えるのか？と質問しましたが、納得できる答ではなかったと記憶しています。くりんぐ文庫を開き、援助を在蘭日本商工会議所にお問い合わせに当たり、在蘭幼児数を知りたいと大使館に問い合わせたところ、義務教育課程の就学児数しかわからないし、調査する予定もないとの返事に、在外幼児の問題、育児期の母親達の抱える問題は、社会の視野の外に置かれていたことを痛感しました。

昨今、アムステルダムのかくりんぐの活動だけでなく、世界のあちらこちらでの文庫活動をはじめ、育児を支え

合う、母親達のサークル活動の話を耳にします。

当事者である母親達の活動を心から支援する者として、国際化時代の育児を支えるネットワークキングが充実し、海外の幼い日本人の子ども達が、より豊かな幼児期を過ごせるよう、医療、保健、教育、保育分野の専門家の方々へ、在外育児への関心を喚起していただきたく思います。

※1 くりんぐ文庫……「オランダに住む日本の幼い子ども達に、日本語で、良い絵本を読み聞かせたい。日本の歌や行事に親しませたい」という母親達の願いと熱意が基になり一九九一年一月オープン。現在会員一四〇名。蔵書一五

〇〇冊。

※2 ちびくりんぐ（後に、ちびっこクラブに改称）……二歳前後の幼児と母親の自主プレイサークル。絵本読みと手遊びが必ず入る。